日曜日の万年筆

池波正太郎

日曜日の万年筆

池波正太郎

新潮社版

日曜日の万年筆

昭和五十五年七月二十日　発行
昭和五十五年九月二十日　二刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三(二六六)五一一一　編集〇三(二六六)五四一一　振替東京四―八〇八
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
定価九八〇円

© Shotaro Ikenami 1980 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

日曜日の万年筆／目次

私の休日 7
初芝居 12
新国劇と私（上） 17
新国劇と私（下） 22
収支の感覚 27
私の仕事（上） 32
私の仕事（下） 37
私の一日 42
真田幸村の隠し湯 47
木靴とウエディング 52
子供のころ（上） 57
子供のころ（下） 62
たいめいけん主人（上） 67
たいめいけん主人（下） 72
新橋演舞場（上） 77
新橋演舞場（下） 82
蕎麦 87
天麩羅 92
野球 96
消化剤（上） 101
消化剤（下） 106
絵を描くたのしみ（上） 111
絵を描くたのしみ（下） 115
炎天好日 120
一匹のイワシ 124
私の夏（上） 129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の夏（中）134
私の夏（下）138
〈チャイナ・シンドローム〉と〈月山〉143
猫147
土俵の人152
鮨157
酒162
忘れぬうちに166
勘ちがい170
衣について175
食について179
住について184
残心189
夢194
名前について（上）199
名前について（下）203
テレビの顔（上）207
テレビの顔（下）212
脇役（上）217
脇役（下）222
年の暮れ226
私の正月231
〈花ぶさ〉の女主人235
試写室にて240
初夢245

装幀　池波正太郎
挿絵　沢田正太郎

日曜日の万年筆

私の休日

私は、むかしから、他人の休日にはたらき、他人がはたらいているときに休むのが好きだった。

太平洋戦争が始まって、海軍へ入る前の一年ほどを、徴用された私は軍需工場で旋盤工員をしていた。

海軍からの召集令状を受けたのは翌年の二月で、その前年から、私は岐阜県の太田へ出張しており、木曾川のほとりに新設された工場で、土地の徴用工員たちへ旋盤の使い方を教えていたが、前年も押し詰ってから工場長に、

「すまないが君、正月は東京へ帰らずに、こっちで仕事をしてくれないか。そのかわり、正月の終りには、十日、休暇を出す」

と、いわれた。

こうしたときの私は嫌な顔をするどころか、大よろこびになってしまう。

正月に帰郷する人びとで混雑する列車に乗るよりも、空いた列車へゆっくりと坐って帰ったほうが、どれだけ休暇がたのしいか知れない。

宿舎で共に暮していた同僚たちは、

「すまないな。一人だけ残して、こんなところで正月をさせて……」

しきりに同情してくれたが、みんなが帰京した後の広い宿舎へ一人残って、のびのびと眠るの

は快適だったし、賄の老婆たちも、
「池波さんは気の毒に……」
と、物資不足の折柄、自分たちの家で食べる餅やら芋やらを運んできてくれ、こちらが悲鳴をあげるまで食べさせてくれる。
戦争をしていたのだから、大晦日も元旦も作業をやすむわけにはいかない。
各宿舎から一人ずつ残って、土地の工員たちに仕事を教えながら、自分の製品もつくるというわけだ。
私がいた工場では戦闘機の精密部品をつくっていたのである。
元日の早朝。
宿舎を出て、靄がたちこめる木曾川を渡し舟で工場へ行くのだが、船着き場へあつまった残留組は、
「こんな田舎で正月をさせられたんじゃ、たまったものじゃあない」
「なさけないよ、まったく」
しきりに、こぼしながら、私に、
「あんた、うれしそうだね」
と、いう。
「いや、別に……」
「だって、うれしそうだよ」
「そうかね」
「おれたちが、こんなおもいをしているのを見て、それがおもしろいのか」
などと食ってかかられ、閉口したことがあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前年のままの、油だらけの作業衣を着て元日からはたらく気分も、なかなかよかった。
現在の仕事に入ってからも、私の休暇は正月ではなく、十二月だった。
したがって、やむを得ない仕事の取材や講演旅行などのほかは、春夏秋の行楽の季節に、自分のたのしみで旅行をすることは、ほとんどない。
六月の梅雨どきか、十二月がもっともよい。
どこへ行っても空いている。列車も旅館も好む日の好む時間に利用ができる。何よりも、これがありがたい。
だから十二月の京都へは数えきれぬほど出かけている。京都へ行って何をするかというと、ゆっくりとホテルで眠り、三条小橋にある〈松鮨〉という好きな店へ出かけて、午後の、客が入って来ない時間をえらび、あるじが握る鮨をつまみながら酒をのんだり、南座の顔見世をのぞいたり、映画を観たりしてすごす数日が、一年のうちの私の休暇だった。しかし、ここ数年、なかなか京都へも行けなくなってしまった。仕事が重なってきて一日か二日しか休めない。
去年（昭和五十三年）は三十日から大晦日にかけて、常陸から房州を少しまわって来たが、何と大晦日に潮来の十二橋めぐりの女船頭が客引きに出ていたのにはびっくりした。
同行の青年たちが、
「どうしても舟へ乗ってみたい」
と、いい出したので、女船頭が着せてくれた綿入れの半天と毛布にくるまり、身を切るような利根川の川風にふるえながら、冬枯れの十二橋めぐりをやった。
このときは、われながら、
「酔狂なやつ……」
だとおもったが、青年たちは、

「いいですねえ」
大よろこびだった。
おそらく、青年たちは、船頭の竿があやつる小舟で運河を渡ることなど、生まれてはじめてのことだったのではあるまいか。
それから佐原へ出て、江戸時代の建物のままで営業をしている〈小堀屋〉という蕎麦屋で年越し蕎麦をすすり、酒をのんだ。
これまた、大よろこびによろこび、
「いい正月を、今日いちにちでしてしまいました」
と、口ぐちにいってくれた。
青年たちも、押しつまった二日間の、ゆったりした気分が身にしみてわかったらしい。
むろん、道路も空いていて、青年のひとりが運転する車は水のながれるごとく走る。
数年前のことだが、十二月の二十七日に軽井沢のホテルに泊ったら、客は私ひとりで、翌日、上州の岩櫃の取材をするためタクシーで浅間山の肩口を抜けて行ったら、ついに一台の車にも出合わなかったことがある。
雲ひとつない鏡のような冬空を背景にした雪の浅間を、こころゆくまでたのしんだものだ。
こうしたわけで、日曜日の私は、平日の私よりもいそがしい。
日曜日には来客がないし、週に三、四度は出かける映画の試写もない。
ゆえに、仕事がはかどるからだ。
だが、去年の秋に神経痛にかかって以来、私は毎週の日曜日に、鍼と指圧の治療を受けに荏原の自宅から杉並の方南町まで出かけるようになった。
何故、日曜の治療にしたかというと、平日なら車輌の混雑で一時間余もかかるのに、日曜なら

ば三十分で鍼医の家へ到着してしまうからである。
鍼を打った日は、どうしても躰がだるい。
帰宅して入浴すると、夕飯までベッドへころがって眠ってしまうので、仕事にはならない。
近ごろの私の日曜は、あまり仕事がすすまなくなった。
つぎの日から、疲れが抜けて元気になる。
だから月曜日に、根気のいる仕事へ立ち向うことになってしまった。
鍼の治療のために、いまの私にとって、日曜日は他の人びと同様の休日になった。
そのかわり、治療を受けている一時間に、小説の構想をととのえる。
それが習慣となるように、自分を仕向けていると、ほんとうに習性となってしまう。
治療室のベッドへ、うつぶせになったとたん、連載中の、いくつかの小説のイメージがつぎつぎに脳裡へ浮かぶようになってくる。
これはやはり、肉体がそのように反応してくれるようになるのであろう。
私は、仕事の行き詰りを頭脳からではなく、躰のほうから解いて行くようにしている。

初芝居

むかしの、東京の下町の人びとは例外なく芝居好きで、新しい年が明けるのを待ちかまえるようにして、それぞれ、好みの舞台見物に駆けつけたものだった。

私の母なども、年の暮れには歌舞伎座なり東京劇場の初芝居の切符を手に入れて、見物の日にそなえ、貧乏暮しの中から羽織の一枚も新調するのである。

母は、私が七歳の春に父と離婚をし、その後は、はたらきながら私たち兄弟を育て、祖母を養ってきたので、年末は最後の最後までいそがしい。

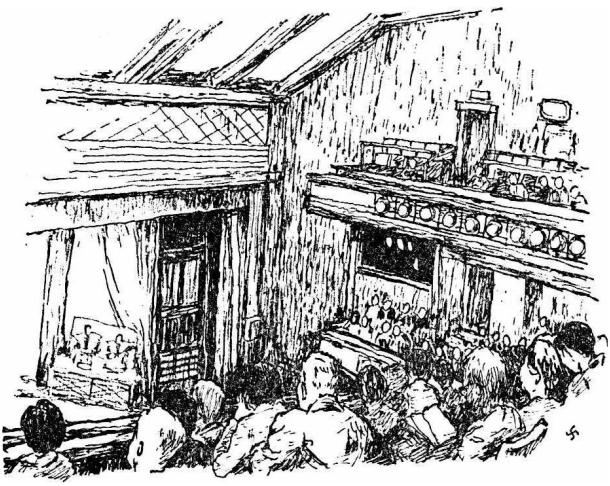
そこで、私は小学校四年生（十歳）のころから、前売りの切符を買いに出た。母と私の二枚を買うわけだが、むろん、三階席だから、早く行って買わぬとよい席がなくなってしまう。

切符は前の月の二十五、六日に売り出される。その日は学校を休んでしまい、地下鉄で銀座へ降り、冷たい朝風の中を歌舞伎座へ向う。早くも切符売場の前から長蛇の列が延々として歌舞伎座の裏までつながっている。

その後尾につき、まず二、三時間は並んでいたろう。切符を手に入れて帰るときも、依然として列の長さは縮まっていない。

ほとんどの客は正面の前の席をねらうのだが、私は、むしろ、花道の上の袖の席を買った。ここならば、たいてい最前席が残っていたし、ななめ左から見下す舞台は、正面から見物するのと

ちがって、役者たちの、
「おもってもみなかった……」
姿態や演技を発見することができて、たのしかった。



当時の歌舞伎座の袖の席には薄縁が敷いてあり、座ぶとんに坐って観たものだ。
年が明けて見物の当日、母と共に歌舞伎座へ入ると、先ず〈辨松〉の五十銭の弁当を予約しておく。そのうれしさというものは少年の私にとって、まったく、
「こたえられない……」
ものだったといえよう。
こうした少年の日があったために、戦後の私は、自分ながらおもいもかけなかった劇作家への道を歩むことになり、それがさらに、今日の時代小説を書く道へつながってきたのだから、いつもいうように、
「死ぬのは怖いけれど、いま、死んでも、おもい残すことない」
のである。

初芝居を観る習慣は、いまの私に消えてしま

ったが、去年と今年は旧知の香川桂子が、帝劇の山田五十鈴の公演に出たので、初芝居の見物は帝劇ということになった。

香川桂子は、かつての新国劇の看板女優で、私も同劇団の芝居ばかり書いていたのだから、私の芝居へは数え切れぬほどに出演をした。いまは香川も私も新国劇を去ったが、家族ぐるみのつきあいだ。

今年の帝劇は、榎本滋民作〈女役者〉で、明治の女役者・市川久女八を山田五十鈴が演じる。

席について、幕があがってから、およそ三、四十分の間は、近年の劇場が、いずれもそうであるように、開演に遅れて入って来る客のために、何度も腰を上げてやらねばならず、落ちついて舞台に目を向けていることもできぬ。

それに、この間は周囲の女客たちのおしゃべりが騒々しく、舞台の役者の声も、ろくに耳へ入らぬ。

「あら、五十鈴が出てきたわよ」

「若いわねえ」

「片岡孝夫、きれいねえ」

「どうして同じ男なのに、こうもちがうんだろう」

「だれとちがうの？」

「うちの主人と」

「あらまあ……」

そうかとおもうと、暗い客席でプログラムをめくる音と煎餅をかじる音が起り始める。

今年は切符をもらったので一等席で観たが、自分の金で芝居見物をする時の私は、いつも、むかしのように三階の袖の席しか買わぬ。いまは、どの劇場でも、一番安い席なら、当日に行って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com